

新保博久

SHIMPO HIROHISA

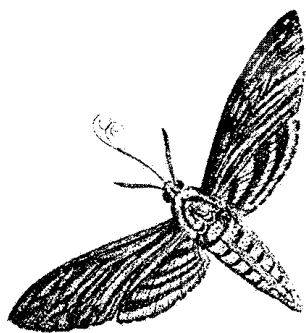
世紀末日本推理小説專號



C H I T K U M A L I B R A R Y

新保博久

世紀末日本推理小說事情



著者 新保博久 しんぼひろひさ

1953年生まれ。1978年早稲田大学文学部卒業、ワセダ・ミステリ・クラブ出身。
卒業後、マニアが高じてミステリ評論家・権田萬治氏に師事。不肖の弟子ならぬ
“不逞の弟子”を自称する。

現在、毎日がメー切、週眠二日制という超多忙生活、売れっこミステリ・レヴューア
である。…独身。

著書に『推理百貨店』本館・別館(冬樹社)がある。

世紀末日本推理小説事情

1990年1月30日発行

久行行刊 35

著者／新保博久

発行者／関根栄郷

発行所／株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前2-8-4 郵便番号111

電話 東京5687-2680(営業) 5687-2670(編集) 振替東京6-4123

印刷／明和印刷 製本／永興舎 カバー・表紙印刷／京美印刷

ブックデザイン／渡辺千尋 + Kintaro gumi

© SHIMPO HIROHISA 1990 Printed in Japan

ISBN 4-480-05135-X

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。

送料小社負担にてお取替致します。



はしがき 1

◆序章◆ 1/10世紀の栄光 5

1 ブラキストン・ライン、一九七五年 7

2 かけあし戦後ミステリ史 17

3 マイウエイを往く作家たち 32

◆第一章◆ 錬夢術師たちの孤独 47

赤川次郎・連城三紀彦

- 1 彼らは逃避を選んだ 49
- 2 強きヒロインの肖像 58
- 3 そして夢の中へ 69

◆第二章◆ 元闘士は小説の革命をめざす

笠井潔・北方謙三

- 1 二人のK・K 83
- 2 ヘアンドロギユヌスの裔 89
- 3 バック・トゥ・ザ・パースト 102

◆第三章◆ 心やさしき人命軽視派 115

島田荘司・岡嶋二人

- 1 オブジェとしての屍体 117
- 2 ゲームとしての誘拐 130
- 3 趣味としてのミステリ 139

◆第四章◆ ニュートラリストよ、故郷を見よ 147

矢作俊彦・栗本薫・高橋克彦

- 1 気分は反“反戦” 149
- 2 イミテーション・ゴールド 159
- 3 ニュートラリストの逆襲 170

◆第五章◆ 人生マイナス・ゲーム・イコール・ゼロ 179

竹本健治・大沢在昌・井沢元彦

- 1 ゲーム的な、あまりにゲーム的な 181
- 2 賞品は人間の命 191
- 3 ルールの中の自由 201

◆終章◆ さらばオシリ・イエスタデイ昭和世紀末 209

- 1 『アルキメデス』に始まる 211
- 2 新人賞、新書、新本格 219
- 3 世紀末の憂鬱 230

あとがき 235

はしがき

何を隠そう、昭和二十八年生れである。これがどんな年かと言うと、NHKがテレビ放送を開始し、早川書房がポケット・ミステリ・ブックスを創刊した年だ。戦後サブ・カルチャー元年と言っているのではないか。

もちろん生れてすぐ、それらを享受できたはずはない。冷蔵庫より先にテレビを買うといったおっちょこちょいの家庭ではあったが、さて、わが家にテレビ受像機が入ったのはいつのことだっただろう。チャンネルはNHKとOTB（大阪テレビ）の二つしかなかった。

ハヤカワ・ミステリを読むようになったのは、それからさらに十余年後だが、テレビよりもこちらのほうが自分の運命に深く影響を与えることになる。学校を卒業しても推理小説からは卒業できず、ブックガイドなどを書いて、原稿用紙と格闘する日々が続いた。筆記具がワープロに替っても、それは仕事に必要だったからで、テレビもステレオもない貧乏ぐらしが長かった。

最近ようやくステレオが入った時、レコード（CDでないところがやはり世間より遅れている）は何を一番に買ったかと言うと、自分でも驚いたことに、クレージー・キャッツの復刻盤だったのだ。

幼児期におけるクレージー体験の刷り込みは、想いのほか強烈だったらしい。

二十年以上ぶりにまともに聴くクレージー・ナンバーの感想は……いやいや、そんな話をするつもりではなかった。私のようにほとんど本ばかり読んで、外界とは無縁に過してきた人間でも、時代の洗礼を否応なく受けており、その根強さは、影響が思わぬところから噴き出してきて痛感することになると言いたかったのだ。もっと普通の他の人々はなおさらだろう。

昭和五十年代に入って、同じ昭和二十年代生れの推理作家たちが次々デビューしてきた。年齢順に、北方謙三、高橋克彦、連城三紀彦、赤川次郎、笠井潔、島田荘司、矢作俊彦、井上泉（岡嶋二人）、栗本薫、井沢元彦、竹本健治といった人々だが、作風の好き嫌いを超えて、これらの作家たちにある種共通した親近感を覚えるのは、デビュー以前に刷り込まれたものに共通点を見出すからのような気がする。それはクレージー・キャッツよりも、ビートルズや全共闘運動や手塚治虫などのほうが大きいだろうが。

彼ら二十年代生れのミステリの送り手たちの作品の本質、創作の秘密などを、みずから同年代生れということに頼って考察してみようというのが、そもそも本書を書くに至った動機であった。もともとは「ミステリー・オン・マイウェイ」と題して、光文社の隔月刊誌『EQ』昭和六十一年一月号から十一月号まで六回にわたって連載されたものが原型となっている。この雑誌は、エラリー・クイーンの頭文字が誌名になっているように海外ミステリの専門誌であり、そこに日本作家のことを書くのはちょっと場違い、毎回の枚数も必ずしも充分でなかったので、より詳しく、より分りやすく、そし

て連載後の情報も盛り込むという趣旨で、今回二倍以上にふくらませた。

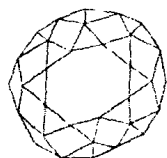
ただし連載後の情報については、とりあげた作家がいずれも現役活動中で、こうしている間にも続々と作品が増えているに違いない。こちらも永遠に改訂し続けるのではたまらないので、いちおう昭和六十四年をもってひと区切りさせることにした（それ以降のデータは、本文の記述と密接な関係をもたない限り省いてある）。改元と推理小説はほとんど何の関係もないのだが、戦後日本ミステリ史を語る場合、西暦よりも昭和二十年代、三十年代と分けたほうが、変遷の実情に合致する場合が多いようなので、そうした区分けが通用する時代の終焉までというわけである。

個人的には私自身ふだん西暦を用いているのだが、従って本書での年号表記は元号によるのを原則としている。序章の1の章題からして、その原則が守られていないのは、私がいかにいい加減であるかを示す証拠にはかならない。

◆序

章◆

1/10
世紀の
栄光



……三十代から四十あたりまでの世代のノンフィクション作家たちの行き方に私は興味を持っている……。いい換えるなら、彼らは戦後生まれの世代である。私は昭和十一年生まれだから、まだまだ若いという意識はあるものの、戦後生まれの行き方を見てみると、やはり世代の違いというものを感ぜないわけにはいかない。……彼らには「生まれも育ちもフリーライター」という体臭みもないものがしみついている。飄飄と諸国漫遊をしている。

——柳田邦男「フェイズ3の眼」一二五回

（『週刊現代』昭和60・6・29号）

Ⅰ ブラキストン・ライン、一九七五年

一杯のカクテルから

知っている人には今さらと思われるだろうが、北海道と本州とでは、棲息する動物の種類がいくらか違う。たとえばヒグマ、クロテン、シマリス、キタナキウサギなどは北海道にしかないし、サル、ツキノワグマ、カモシカ、モグラなどは本州以南にしかない。これは動物地理区上の所屬が異なるためで、北海道はシベリヤ亜区、本州以南は満州亜区に、津軽海峡で分けられる。滞日中のイギリスの動物学者T・W・ブラキストンが発見したので、この境界線はブラキストン・ラインと呼ばれる。

ブラキストン・ラインはそういう地理的空間的な境界だが、歴史的時間的な連続の中にも、同じような目に見えない線を引くことが出来るのではないだろうか。早い話、日本ミステリ史上のブラキス

トン・ラインは、昭和五十年あたりにあるというのが私の観測である。それ以後に登場した推理作家たちと、それ以前からの活躍組とを比べると、大きな違いがあるように思われるのだ。

まず、推理小説テーマの定番ていばんともいえるべき「密室」をとりあげてみよう。

密室殺人は、世界最初の推理小説、エドガー・アラン・ポーの「モルグ街の殺人」（一八四一）にすでに描かれており、その歴史は推理小説そのものと同じだけ長い。しかし日本では、木と紙で出来た家屋はなほだ密室向きでないと見えて、戦前はほとんど扱われることがなかった。わずかに江戸川乱歩が、デビュー以前の習作「火縄銃」（大正4頃執筆）、「D坂の殺人事件」（大正14）、長篇「孤島の鬼」（昭和5）などで意欲を見せたが、密室トリックそれ自体はどれも大したものではない。

戦前日本の密室ミステリでは、ほとんど唯一の傑作として小栗虫太郎の「完全犯罪」（昭和8）が挙げられる。この中篇は中国大陸南部を舞台に、イギリスの人類学者が遺した元研究所の浴室で密室を構成している。水道管を通じて笑気ガスを送り込んで被害者に笑い声をたてさせるといふ欠陥トリックが一部に使われている（笑い顔に似た形相になるだけで声は出さなはずだと、竹本健治に教えてもらった）のを減点しても、なおじゅうぶん名作ではあるけれども、戦前の密室小説はまずこんなところであった。

敗戦後、それまで戦局の悪化につれ禁圧されてきた探偵小説が自由に発表できるようになり、その先陣をきった横溝正史の「本陣殺人事件」（昭和21連載）こそ、密室テーマに正面から挑んだ日本で初めての長篇にはかならない。密室には不向きな日本家屋を逆手にとり、雪に覆われて足跡を残さず

には出入りできない離家^{はなれ}全体を密室に見立てたものだ。続いて高木彬光が『刺青殺人事件』（昭和23）をひっさげてデビューしたが、こちらは西洋風の浴室に首と手足だけ残して胴体が持ち去られるという不可能犯罪であった。

渡辺剣次は『ミステリイ・カクテル——推理小説トリックのすべて』（昭和50、講談社）の中で、この二長篇を契機として日本でも多くの密室物が生れたと言い、土屋隆夫の『『罪ふかき死』の構図』（昭和24）、鮎川哲也の『赤い密室』（昭和29）など、昭和二十二年から三十一年までの八短篇の題名を列記している。ところが三十二年以降については、短篇でなく、その年から長篇公募に切替えられた江戸川乱歩賞の受賞作のうち密室トリックを扱っているものを挙げることで代えている。これは、密室物が短篇中心の時代から再び長篇時代に回帰したと例証しているようでもある。

それは一見、密室の繁栄みたいに見えても、実のところそうではない。密室物が短篇から長篇へと移行するちょうど境目あたりより、リアリティを重視する社会派ミステリが擡頭してきて（松本清張の処女長篇『点と線』は昭和33に刊行）、密室殺人に代表される従来のゲーム的本格推理は衰微した。それでも密室の伝統は長篇の一要素として細々と受け継がれたが、あくまで副次的な扱いであり、乱歩賞長篇の中でも、密室が含まれていてもそれがメイン・トリックであることはほとんどない。

密室に相当量のウェイトをおいているのは、この中では森村誠一と大谷羊太郎だろう。高層ホテルや芸能界など現代的で華やかな風俗に彩られていても、両氏の受賞作は骨格的には古い探偵小説を踏襲している。こういった作品が書かれ評価されたのは、それより以前、佐賀潜から西村京太郎まで社

会派風の作品が四つ続いており（西村氏は現在のトラベル・ミステリからは想像しにくいがデビュー当時はそうだった）、そうした風潮への反動があったようにも思われる。あとでも触れるが、ちょうどその四十四、五年ごろに江戸川乱歩、夢野久作らのリバイバル・ブームも起っているのだ。そして四十年代末期に再び、和久峻三、小林久三と社会派への揺り返しが乱歩賞受賞作に見られるのは興味深い。

とにかく昭和三十年代後半から四十年代には、リバイバル作品は別として、現代作家の密室物は、当世風の意匠に装われた長篇ならともかく、ひたすら密室だけを売り物にするような短篇では生き残れなくなっていたのである。『ミステリー・カクテル』が書かれた当時は、それが最新事情だった。

この『ミステリー・カクテル』は、もともと渡辺剣次が雑誌『創』に昭和四十九年一月から五十年三月まで伊勢省吾名義で連載したものだから、引例はとうぜん昭和四十九年にまでしか及んでいない。乱歩賞受賞作で密室トリックを扱った作品の一覧表も、小林久三の『暗黒告知』（昭和49）で終わっている。しかし、乱歩賞応募者はなぜか密室を好む傾向にあり（作中の一趣向にすぎない形が多いものの）、『暗黒告知』以後も密室長篇は二、三にとどまらない。

ニュー・クラシック 新古典調時代

昭和五十一年に入ると、密室に限らず、『ミステリー・カクテル』に書かれたさまざまな項目で事

情がそれまでと異なってくる。その前年、五十年二月号から創刊された雑誌『幻影城』は、探偵小説の代替名称として推理小説という呼称が定着して久しいのに敢えて「探偵小説専門誌」と銘打ち、当初は主に戦前から清張以前までの作品をリバイバルしていたが、やがて新人賞を設け、そこから輩出した作家たちによって密室短篇は再び活況を呈し始める。泡坂妻夫「右腕山上空」（昭和51）、筑波孔一郎「密室のレクイエム」（同）、霜月信二郎「密室のショパン」（昭和52）、連城三紀彦「ある東京の扉」（昭和53）といった短篇のほか、五十二年には、五つの密室トリックを鏤め作品全体も一種の密室的構成に封じ込めた竹本健治のデビュー長篇『匣の中の失楽』も連載が開始された。

この中には泡坂妻夫が長篇第二作『乱れからくり』（昭和52）で第三十一回日本推理作家協会賞を受賞し（このとき同時受賞したのが大岡昇平『事件』というのは、対照的で面白い）、『幻影城』新人として最初のスターとなったが、そのころ「隣の部屋より」と題するエッセイでデビュー以前の時期を回想している。泡坂氏は、自身のかねてからの趣味である奇術を、ミステリにとつて隣接関係にある隣の部屋だと喩えて、

「こちらの部屋に入り浸りになっていたこともあります。探偵小説の部屋のトリックの加減は、また格別なものがありました。ところが、こちらの部屋の様子が、少しずつ変わってきた。従来の、住むためにはどうでもいいような、ごてごてした装飾が取り替えられ、機能的で合理的な調度で、部屋は見違えるほど、近代的になってゆくようでした。これは、ちょっと、妙だなと思っっているうちに、部屋の表札も、探偵小説から、推理小説に書き替えられたようです。（中略）こちらの部屋のための、い